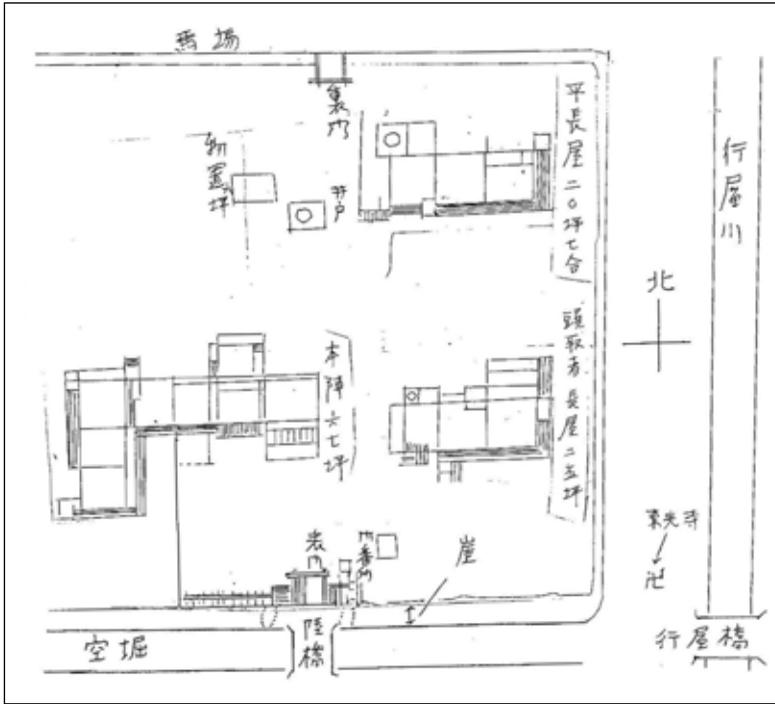


栃木県真岡市の芳賀城跡代官屋敷の見取図



田村豊幸

栃木県の真岡市の台町には田町との間にお城山と称する高台があり、街の中心で南北に位置しており、むかし芳賀の殿様の支配する芳賀城があった。

城といっても、平地にある低い岡の上に建てた平屋の建物で、最後は二十四代続いて慶長二年に豊臣秀吉に滅ぼされた芳賀高武のときまでであったものである。

江戸時代に入って代官が数代住み続いた、いわば代官屋敷であるから、町の人が夢に描きたい石垣、白壁、屋根瓦のものとは似ても似つかないものだった。

芳賀公につかえて真岡に昔から住んだと伝えられる田村と



真岡陣屋の由来などを説明する案内板と二宮先生記念石碑

のではない。台町の南の方に“梨畑”と称して残っている。昔の目下田医院のご子孫（いま上河原良衛先生）の土地である。

田村は父の代に真岡から消えてしまったから、曾祖父は物凄いい先見の明があったのかもしれない。孫に財産管理能力のないことを百年以上も前に予測したのもあろう。

しては、なんともしないが、事実は仕方がない。その終わり頃の芳賀公に良く仕えたといつて、土地を少し貰ったものが残っていたが、曾祖父が娘を旧家の一族へお嫁にやるときにつけてしまつて、いまは田村家のもの

昭和二十四年、田村は真岡町からいまの東京へ引越したが、明治の火事で焼け残った土蔵の中に城痕の代官屋敷の見取図もあった。

真岡市で保存している資料の中に、同じものがあるかどうか、確かめられないので、もし無いとすれば貴重なものと思いい、ここに残しておきたい。



この見取図（前頁

上段）は寛政九年（一七九七）竹垣代官が同年十月に建設したときのものと、父は祖父にきいたという。代官屋敷は嘉永四年（一八五二）に焼失し、二宮金次郎が山内代官に復興を命じられ、二宮金次郎は空堀を埋めるようにいわれ、その土で田町一帯にひろがる湿地を新しい宅地にした。その東に接

芳賀高経により築城されたと、舞丘城の由来を伝える案内板

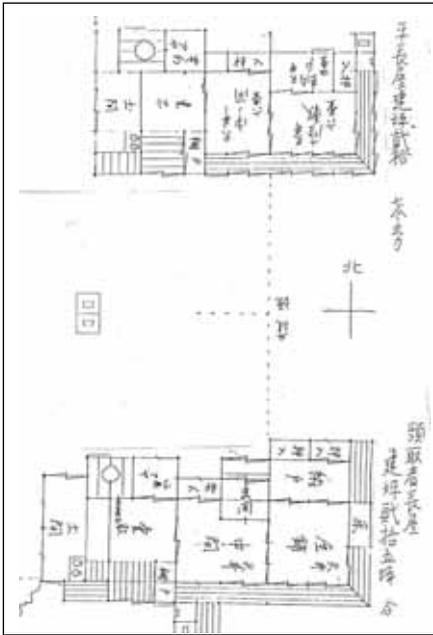
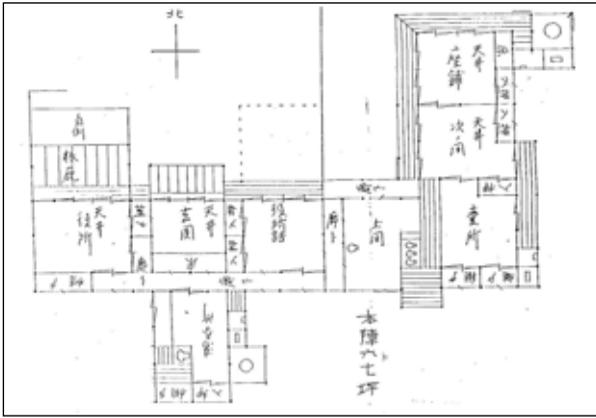
するいまの荒町は、田町と区別して新しい町の意味で、もとは新町（あらまち）と呼んだが、湿地帯、荒れた土地のつもりで荒町と呼ばれるようになったとの話もある。

いずれにしても、江戸時代さらに東の大前神社まで真岡村から行く細い一本路の両側には、一列の藁屋根が並び、そのうしろには見わたす限りの田圃が見えたといわれている。

芳賀城址代官

屋敷見取図

高台に三軒の平屋



があり、東南が崖に囲まれていた。南はさらに南へ続く岡を切りくずして空堀として、防衛陣地としての価値を高めた。のちに堀を埋めた広い道路にしていまに残っている。

この高台は北にのびているが、古代人が住んでいたのので、石器、土器が発掘されている。つい最近、真岡市小林の飯塚隆東さんという方から、ここに示す「二宮先生遺跡 真岡陣屋址」という写真(前頁⑤)をいただいた。それによると、私が土蔵から発見したものと同じものであった。

真岡市は最近、流行の波に乗って二宮町(旧久下田町)を合併したので、二宮町との関係を明らかにする目的で、解説

看板を作ったのである。ところが、こいつものは永続するものでないという前例があるから、肝心なものは文書にしておきたい。

地方行政の責任者が変わるまでは、それなりに役立つ看板である。

.....
 上の間取図は、本陣と平屋の各部屋の詳細を示す